

あぶら通信

第34号 2012年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県高山市国府町字津江3225-1
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



いらっしゃいませ狸

テレザ・ボコバ(チェコ国よりのボランティア) 絵

飛驒便り

「^{しちしち}節々^{うとむ}とう^{めぐ}共に^{てんどう}巡る天道ぬ

またん^{むどう}元ぬ^{むどう}座^{うり}に戻る嬉しや」

(季節と共に星座がめぐり、また元の星座に戻る嬉しさよ)

この歌は沖縄の歌手グループ、りんけんバンドの「ちゅらちゅら」(清らかだ美しいの意)の一節です。人の世にどのような事があるろうが、季節は正直に巡ってくる、私はこの一節に心癒やされ助けられます。

今年もまた東の夜空に冬の星座三星のオリオン座が巡ってきました。あぶらむ通信お手の皆様には本年もお元気でお過ごしのことと思います。

●あぶらむの会創立25周年と法人格取得

1987年4月に旗上げたあぶらむの会、先日会員のH姉より25周年記念お祝いケーキが送られてきた。日々の雑事に追われ、この記念の年を祝うことの出来なかった私たちだったが、いただいたケーキを口にしながら四半世紀という月日を想い返すこととなった。

そしてこの記念すべき年にあぶらむの会は「一般社団法人」という法人格を得て新たにスタートすることになった。普通は真っ先に法人格を得て事業をスタートするのですが、あぶらむは正反対で25年の歩みとささやかな実績をもって、やっと法人格取得にたどり着きました。

以下は今年から発行されたメルマガによるあぶらむ通信に寄せた記事です。限られた人しか届いていないと思いますので再録させていただきます。私の正直な気持ちです。

《法人格を取得したあぶらむの会》

2012年1月5日、あぶらむの会は新しい人格を得て、「一般社団法人あぶらむの会」となりました。1987年に人格なき法人(みなし法人)として出発した実践教育活動あぶらむの会は、25年間のささやかな実績を携えて、正式な法人格を得たということは、あぶらむの会をここまで育ててきた者として大きな喜びです。これまでは、みなし法人といえ、法律的には、大郷の個人商店の扱いで、何かにつけ心苦しいことや不本意なことが多々ありました。(例えば、あぶらむの会への寄付が、法律的には大郷個人への贈与的扱いを受けること等)。

この25年間、私たちなりに一生懸命やってきたつもりですが、しかし、それはあぶらむの働きを支援して下さる皆様からの支えがあったからこそ可能となったことです。「あぶらむの会」が今日こうしてあるのは、皆様方の支えによるものなのです。

発足以来、あぶらむに法的な人格を与えることを願ってきました。けれども当時は今日と異なり、法的な人格を取得するには多くの課題、困難がありました。しかし、3～4年前の法律改正により、「一般社団法人」という新しい法的な人格が生まれ、その中の「非営利型社団」と自己規定し、法人格の取得となりました。私(私たち)個人のおもいとしては、土地や建物等の財産をはじめ、皆様から預かってきた数々のものを、これでやっと法律的にも、皆様のものとしてのあぶらむの会のものにできたと、一荷物肩からおろしたように安堵しています。

それでは「一般社団法人」という新たな法人格を得たことによって何が従来と異なるのでしょうか。法律的なことや税務的なことは、川上詩朗弁護士や岩沢満税理士におまかせして、私はこのように考えます。法人取得の時、税務署署員より基礎知識として、「財団法人は金

の集まり、社団法人は人の集まりです」と言われました。「社団とは人の集まり」、すなわち、これまで大郷個人のおぼらむ構想だったものが、これからは「おぼらむ構想」に賛同する人が集まって、そのことを実現して行く集団となったという事、それが私にとっての法人格を得た「一般社団法人 おぼらむの会」なのです。「おぼらむ構想」の発案者、牽引役は大郷個人だったかもしれませんが、これからは「人の集まりとしてのおぼらむ」として、「人生の良き旅人づくり」という理念を共有する社団(人の集まり)によってなされて行くということです。これはおぼらむにとっても私個人にとっても、大きな変化です。

何か育ててきた子どもが独立した人格をもって巣立って行くようなもので、嬉しくもあり、少々寂しくもありという親の心境と似ています。しかし、おぼらむは個人の所有物ではないのです。これで良かったと心から喜んでいきます。

《おぼらむ これからの働き》

おぼらむはこれまで「人生の良き旅人づくり」を基本理念とし、人生旅路を旅する人々をサポートする立場として、「旅人の宿」を建設し、それを中心に旅人のサポートと共に種々の実践的教育活動を行ってきました。

しかし、その中で近年特に、次代を背負う若者達の「人生旅路を旅する力」が劣(おとろ)えてきているように思えてなりません。家庭裁判所からの委託を受けてなされている「補導委託少年」(通称、家裁少年)との8年余りに渡る生活を通して、またTVゲーム等、仮想現実に浸りきった現代少年の生の姿と、それがもたらすところの数々の問題を見るにつけ、少年達の中における「旅する力」のおとろえは否めないと思います。それは他方では、私たち大人の責任でもあります。

そのような状況の中で、私はどのような働きができるのか、また、与えられたおぼらむの里というこの環境を今よりももっと活かすにはどうすればよいのか考えてきました。その結果、次のような「里山生活学校」構想をもつようになりました。私も現役として第一線に立てるのはあと10年もありません。やるのか、やらないのか、やるとすれば、今がその時、と思うようになってきました。いろいろな意味で風が吹きはじめ、時が満ちてきているように思います。皆様のご判断、ご意見をいただければ嬉しく思います。

～おぼらむ「里山生活学校」～

●構想

この「里山生活学校」は初期のキリスト教主義学校が重視していた“寄宿生活”、“共同生活”を中心にこの自然環境の中で「環境教育」を意識しつつ、“ものをつくる”ことを実践しながら、全人格的な青少年の育成を目指すものです。

おぼらむの里が立地している「里山」とよばれる地域は、営々と営まれてきた先人達の豊かな知恵に満ちたところです。木の活かし方、用い方、炭火焼き等“環境教育”の一つの出発点はこの里山とよばれる地域にあると私は考えます。

また、おぼらむの周辺には“職人”とよばれる人が沢山いてその協力が得られること(大工、家具、陶芸、染色、農園芸、蕎麦打ち等)。そしてまた、おぼらむの会会員の中に各々の分

野での著名な方々がおられその協力が得られること等、恵まれた環境条件の中にあります。これらの与えられた環境や条件を活かせば、閉塞した現在の日本の教育状況に対して、一つの大きなインパクトと将来的可能性を示すことができるものと確信しています。

そしてこの里山生活学校と家庭裁判所の補導委託による家裁少年との関係ですが、これまでの経験で同じ傾向の問題を有した少年だけを集めるといことはあまりよい結果を得ることはできません。“家裁少年”だけを対象にした施設にすることは無理が多く、あまりよい結果を得ることができないと考えます。多様な背景を持つ他の少年達の中で普通の一少年として迎え、日々の生活指導を通して気づきを与えていくことが重要かと思ひます。



＜構想の実現に向けて準備中＞

●仕組み

対象 16歳～20歳未満の者で高校卒業資格を目指す者

形態 ・少年達は全て、地元の高山高校通信課に入学し、その生徒となる。

・少年達は全て、あぶらむでの寄宿生活を送ることとする。

・午前中は高山高校通信課(以下、学校)から送られてくる各科目の課題に取り組む。

そしてあぶらむのスタッフがそれをサポートする。また、あぶらむの会員で各々の分野で活躍されている人達の特別講義、講演、実技指導を得る。そしてこれらの特別講演を地域の人達に提供し公開講座とする。

・午後は“ものを育てる、ものをつくる”をテーマに農業、林業、各種ものづくり等、全員それぞれのフィールドに出て自分たちの生活をつくりあげて行く。

・定員は一学年8名とし、3学年24名までとする。

・この24名の里山生活学校生の外に最大3～4名までの家庭裁判所補導委託制度による「家裁少年」を受け入れることとする。

・あぶらむ里山生活学校の修練期間は、通信課の学習過程にあわせ3カ年とする。

・ものづくり等は全て一級の職人の指導を受け、そこでつくり出されてくるものを販売し(セールス等の実学)、そこで得た収益は少年達の研修旅行の費用にあてる。

(研修旅行先、韓国、フィリピン、タイ、ネパール等、これまであぶらむが関わってきたフィールド～国際交流、国際理解)

この「あぶらむ里山生活学校」構想を実現しようとすれば多額な費用を必要とすることになります。新しくできた「理事会」で議論を重ね、これまであぶらむを支えて下さった皆様方のご意見をうかがいつつ、慎重に決断して行きたいと思っています。もし、この「里山生活学校」建設ということになれば、私、大郷の代ではこれで終り、どうぞ最後のお力をお貸し下さいますよう心よりお願い申し上げます。

昨年2012年、今年は大切な人との別れなど寂しいこともありましたが、嬉しいことも多々ありました。てくれました。それから、いつもより人の事を考えたりするようになりました。

特に10月初旬、カトリックの修道会で聖母訪問会の皆さんがここで院長会議及び研修会をもたれたが、その際「法人会員」としてあぶらむの働きを応援すべき申し出がありました。とっても力が与えられ嬉しく思いました。

このように今年も多くの方々より大きな力が与えられました。この押し出しによって来る年も着実な歩みを重ねて行きたいと思っています。

それではどうぞよいクリスマス、そしてよい新年をお迎え下さい。

2012年12月
あぶらむの会 代表 大郷 博

一般社団法人 あぶらむの会 第一回 記念総会のご案内

会員の方、また当会の活動に関心ある方、ご参加下さい。

日 時 2013年3月2日（土）15時

場 所 目白聖公会 会館

東京都新宿区下落合3-19-4

（JR目白駅を出て左、徒歩5分）

2013年 第13回子どもから大人までのネパールの旅

静寂なジャングルとそこにすむ野生動物との出会い、眼前にせまる神々しいまでのヒマラヤの山々。ネパールは心の安らぎと感動で一杯です。子どもから大人まで参加者全員で協力しあっての旅です。

期間2013年3月26日～4月6日（12日間）

お問い合わせはあぶらむの会へ

社団法人Q&A

回答者：川上詩朗（あぶらむの会監事／弁護士）

Q：あぶらむの会が社団法人になったメリットは何ですか。

A：あぶらむの会は、これまでも団体としての実体はありました。しかし、法人格（権利や義務が帰属する主体としての地位）は認められていませんでした。そのため、たとえば、あぶらむの宿のような不動産や、預貯金、自動車、重機などの財産は、法律的には、あぶらむの会代表である大郷先生個人に帰属していました。これに対し、あぶらむの会が社団法人になることにより、これらの財産や権利等があぶらむの会に帰属することが明確になりました。これは、あぶらむの会の活動を支える財政的基盤が強化されたといえます。

また、自然人は亡くなることがあります。社団法人は、解散などの消滅事由がない限り、団体として存在し続けます。そのため、世代を超えて持続的に活動できる基盤が確立されたといえます。世代を超えて持続的に活動できる基盤が確立されたことは、あぶらむの会が掲げている目的を未来に向けて創造的に実現していくための可能性が広がったといえるのではないのでしょうか。社団法人が非営利的な活動を行っていると思われる場合には、税法上も優遇されるという実利的なメリットもありますが、未来に向けた活動の基盤を確立したところに最大のメリットがあるのではないかと思います。

Q：社団法人になって、具体的にどんなところが変わるのですか。

A：あぶらむの会は、これまでも団体としての活動を行ってきたと思います。しかし、その活動には法律上の規制はありませんでした。いわばラフに運営してきたといえるかもしれません。しかし、これからは、法律（一般社団法人及び一般財団法人に関する法律）に従って会が運営されなければなりません。あぶらむの会の基本的な事項は総会で決め、日常的な事項は理事会が決めることとなります。毎事業年度終了後一定期間の間に定時総会を開催すること、会の日常的な活動を定めるために定期的に理事会を開催すること、会の活動が適正に行われているか監事の監査を受けること、毎事業年度ごとに、事業報告書、事業計画書、計算書類（貸借対照表及び損益計算書）、附属明細書などを作成し、定款の定めにしたがって理事会や会員総会の承認を得ることなど、これまでになく“ルールに従った運営”を心がける必要があります。

また、社団法人の主人公は、会員のみなさんです。これからは、会員のみなさんの総意で、あぶらむの会の基本的な方向性が決められていくこととなります。そのためには、その判断材料となる情報が十分に会員のみなさんに提供されることが大切です。これまで以上に、あぶらむの会の活動の様子を会員のみなさんが共有することが大切になるといえるでしょう。そして、なによりも、会員のみなさんがこれまで以上に積極的にあぶらむの会の活動に参加することが期待されているといえるのではないのでしょうか。

心に残った記事より

—医療費や介護費として次世代の「私」に多大な負担をかけながら、それを補ってあまりある生き方を見つけなければ、次世代の「私」に申し訳ないでしょう。— (本文より) 同>>

山里で仙人のような生活の私、世の中にどんな本が出ているのか知る手掛かりは新聞広告ぐらい。そんな私を気遣ってかいつも刺激的な記事を送ってくれる卒業生の小川卓君(川越胃腸科病院勤務)。今回も深く考えさせられる記事を送ってきてくれました。少し長文になりますが、皆様と共有したく思い、出版社の許可を得て掲載いたします。

物理学的世界観から生物学的世界観へ

—「私」の捉え方を変えるとき—

東京工業大学大学院生命理工学研究科教授 本川達雄(もとかわ・たつお)

出典：月刊 MOKU (2012年11月号)より全文転載

MOKU 出版(株)による転載承認済

闇夜を煌々と照らす明り。ネットで繋がり常に開かれた市場。

二十四時間営業するコンビニエンスストア。

現在に至るまで、人間は便利さを追い求め、文明を押し進めてきた。

しかし、便利であるはずの、その文明が私たちを追い詰めている。

人口増加、食料不足、紛争問題、経済的破綻…。

物理学的な発想から築き上げられた文明は、明らかに限界を迎えている。

いま必要なのは、これまでとはまったく異なる発想、新たな文明だ。

物理学的世界観から生物学的世界観へ。生物学者の本川達雄氏は、

根本の視点を変えることを説く。

そこで語られる生物学的世界観とは、現代文明の矛盾を突く視座を

与えるとともに、新たな文明の可能性を示唆している。

ものごとの多様性を無視した物理学的世界観

近代の社会は、古典物理学によって形成されてきたと私は思っています。ニュートン力学を基礎にした技術がここまで豊かな社会をつくってきたのです。当然、そこでは世界の見方も古典物理学に則ったものになります。

近代の学問をする人たちは、文科系の人も含めてみな「ニュートン力学のようなきれいな体系の学問にしたい」という思いを強く持っていました。デカルトもカントも、そしてアダム・スミスもみなそうです。数学を使って、数値化することを重要視してきた。

この考え方にならえば、すべてはデジタル化できるということになります。1 + 1 は必ず2になる。1 という究極の粒子があると考える。そして、その粒子はすべて同じなんですね。粒子を2つ足せば2になるし、3つ足せば3になる。ここでは、足し算で世界ができていく。

例えば、分子という概念はいい例です。その辺に酸素の分子がいっぱい飛んでいます、その分子の1つひとつには個性なんか何もないと考える。本当は分子に髭(ひげ)が生えていたりあばたがあったり、個性があるかもしれないですよ。でもそうは考えずに、みなまったく同じ酸素分子とみなす。そして、そういう粒子(基本の要素)を足し算して世界を構築する。これがニュートン的な世界です。この世界観で、近代の社会はできているのです。

物理学の世界観では、質の違いは問われず、量だけが問題とされます。その考えがそっくり貨幣経済に持ち込まれています。『もの』とは、本来それぞれ質が違って、かけがえがないものです。本当は交換なんかできない。それを貨幣経済では、値札を貼り、量化して、交換ができるようにしてしまう。質の違いを金額の多いか少ないかだけで表して、『もの』を一直線に並べて、多いほうがいいのか少ないほうがいいのか、安いほうがいいのか高いほうがいいのかという形で、価値を数量化してしまいます。

そうすると、「幸せは金の多いことである」というように、非常に単純に物事を考えることができるようになる。これが結局、いまの価値観なのです。物理学を基礎にした、物理学的文明です。それに対して、私が考えたのは、世界を、生物学を基本にして見たらどうなのだろう、ということでした。

経済学においては、食物の値段と携帯音楽プレーヤーの値段とは、とりわけて区別など付かず、いっしょくたにされています。しかし、生きていくために絶対必要なものと贅沢(ぜいたく)品とは、実は質が違う。

でも質の違いを持ち込ませない、というのが、物理学的発想に基づく経済学です。食べるものがなくなったら、いくら音楽を聴いていたって飢え死にしてしまいます。そのことがいま、無視されています。農産物の値段はべらぼうに安いでしょう。なければ死ぬというほど大事なもののなのに安い。ネットや携帯電話の使用料として払うお金のほうが、食費よりも多いという生活をしている人すらいますね。

人間にとって何が大事か、という考えがそこにはないのです。結局、非常に大事なところは、無条件に満たされているというのが大前提になっています。だから、その部分はあんまり頭がない。それで、それほど大事ではないものにいろいろ差別をつけて、こっちがいいあっちがいいって言いながら、多額のお金を払っている。これが、現実です。でも、本当はお金だって、区別はあるはずなのです。つまり、大事なものを買うお金と、そうでないものを買うお金と。

同じヒトと言ったって、個人個人みんな顔付きが違うじゃないですか。それでも同じ種です。生物とはそもそも多様であって、同じではないんです。そういう多様さが、意味を持つのが生物の世界なのです。とっかえが本当はできないし、そんなに簡単に数量化できるものではない。だから、多様性を考えるような、生物学的な世界の見方をもう少し大切にしようと言いたいのです。

生物学の世界では「私」は次の「私」に繋がっていく

生物には「生き残って子孫を残す」という根本的な性質があります。これを「生物はずーっと生き残っていく」というのが基本だ、と言い換えてもよいと私は思っています。もちろん、どんなに生き残っていこうとしても、個体は必ず傷つきすり減っていき、永遠には生き

られません。その対策として、個体としては死ぬけれども、自己とそっくり同じ子どもをつくって、子どもの形で生き延びる。そうやって、世代を更新しながらずっと生き延びていくのが、生物なのです。そのように体がつくられているのです。逆に言えば、ずっと続いていくように個体が行動しなければ、それは生物としては間違った行動です。

しかし、いま私たちはずっと続いていくようには行動をしていません。こんなに環境を悪くして、赤字国債を大量に出すなど、自分の世代のことしか考えていません。これでは、次の世代は困ってしまいます。生き残れないかもしれません。現代日本人は、生物としては失格です。そもそも少子化とは子どもを産まないから起こるわけで、これはもちろん生物として失格です。

少子化は高齢化とセットで起こっています。その結果、年寄りに金をみんな吸い取られて、若者は、お先真っ暗になっている。結婚もできない、子どももつけれない。若者は希望を持たせてもらえません。でも、若者が希望を持てなかったら、年寄りだって希望が持てないと思いますよ。自分が死んだ後でも、子孫も国も地球も繁栄していると思うからこそ、いま、安心して生きていられるものではないでしょうか。そしてそういう思いをみんなが持つということは、そもそも生物というのは、次の世代に繋がっていくものだということが、私たちの考えに、おのずと反映しているからだと思います。

次の世代の「私」をつくる。さらにその次の世代の孫としての「私」をつくる。その次の「私」をつくる。そうやって「私」を渡していくのが、生物学的に見た「私」です。「私」というのは、いまの世代の「私」だけではないのです。そういう観点からみれば、次の世代が生きにくいやり方しかしていない、いまの社会のやり方は、生物としては、どうにもいただけません。

みんな、いまの「私」が死んでしまったら後はどうなっても知らない、と行って、自分だけがいちばんいいように振る舞っています。労働組合もそうです。自分たちの給料は減らさない、その代わり若者はみんな派遣にして安くこき使う。次世代のことを考えたら、自分の給料を半分にしてでも、新入社員を正規で雇うというのが、正しい次代の労働者のつくり方でしょう。けれども、そういうふうには一切動かない。次世代を全然育てず、次世代をただ食べ物にしているだけです。自分だけよければいい、というように振る舞っているわけで、きわめて利己的です。これでは社会が続きません。

とはいえ私は、利己主義をやめろなんて言いません。人間は利己的なものです。利己主義をやめろと言っても、誰も聞く耳は持たないでしょう。私は利己主義大いに結構と言います。でも、その利己の「己」とは何かを考えて欲しい。利する「私」とは何かということを考えて欲しいのです。生物は「私」を長続きさせる手段として、「子どもの私」「孫の私」と世代を交代していくのですから、生物学的に見れば、「私」は「いまの私」だけではありません。次の世代もその次の世代の「私」もみんな「私」です。だから子孫の「私」を含めたトータルの「私」がよくなる利己主義でなければなりません。もっとも基本的な「私」「己」の考え方が、生物学的に見れば、普段の考えとは違う。こういう見方があるということを考えて欲しいのです。

生物学的な「私」の見方を、もう一歩進めてみます。生物学的に見れば、環境も「私」だと捉えられると小生は考えています。生物というのは環境に適応して生きています。環境がなくなってしまうたら、その環境に適応して生きてきた生物は、もう生きていけない。いま、

生物の多様性がどんどん失われていますが、それは、その生物の住んでいた環境が、どんどん破壊されているからです。それほど環境は大事なもの、かけがえのないものです。環境がなくなれば「私」は死ぬ。だったら環境も「私」の一部と捉えてもよいのではないか。

いま生きているこの体を持った「私」だけが「私」であり、周りなど関係ないのだと考えるのも、物理的考え方の反映と言っているいいかもしれません。基本粒子があって、それは絶対変わらないという物理学的な考え方です。でも、「私」は周りの様々なものとのやり取りの中でできあがっている。だから、そこまで含めて「私」と、生物学者としては考えてみたいのです。

科学によって火をつけられた欲望は、人に幸せをもたらすのか？

私は時間について常日頃考えているのですが、物理の時間と生物の時間では異なると思っています。普段、日常の会話の中で「時間」というときには、いろんな意味合いを込めて使っているものです。しかしいざ時間とは、と表立って考えると、すべてに共通する時間、つまり時計の時間が時間だとなってしまう。そういうふうには単純化・共通化して、確実に数字にできるようにする、これが物理学的なやり方です。ニュートン力学における絶対時間を唯一の時間と、常識的には考えます。

私たちは、小学校からずっと古典物理学的世界観という、ひとつのものの見方で育っています。だから、それしかないと思っている。時間も絶対時間ひとつ。しかし、そうではない生物学的な見方もあるのです。生物学的に見れば、時間は動物の体の大きさによって異なります。これにはエネルギー消費量が関係しており、動物の時間の進む速さは、エネルギー消費量(体重当たり)に正比例します。もちろん、時間がいろいろあるなんてとんでもない話だと、反発をする科学者も多いでしょう。ひとつのものにまとめてしまうのが科学であって、究極の一なる真理まで辿り着かなければ科学ではない、とするのが正当な科学のやり方です。しかし、そんなふうには単純化してしまうと、現実を、見る目を失ってしまう恐れがあります。現実には複雑です。その複雑なものを単純化するのが物理学ですが、複雑なところに意味があることもある。実は生物学においては、複雑性や多様性に大いに意味があるのです。これが生物学の特徴のひとつです。

科学の特徴ということ言えば、科学では価値のことは取り扱いません。「べし」というのは価値ですから、どう生きるべきかなんてことは取り扱わないのが科学です。原発はつくりまします、原爆はつくりまします。そこまでは理科系がやる。けれど、それをどう使うべきかという価値判断は、文科系に任せる。これが科学のやり方です。しかし、これだけ科学が大きな力を持ってきているいま、それを扱っている技術者や科学者が、自分たちが生み出したものについて、それをどう使うべきなのかという、価値の話をもっと抜きにしてもものをつくるのが許されるのかは、考えなければいけません。これをつくったらどういう影響があるのかについても、あらかじめよく考える必要があります。

携帯電話が登場して、世の中のやり方がまったく変わったじゃないですか。それがよかったのか悪かったのかは分かりませんが、ただ、それだけ影響力があったことは確かです。それを、「影響力なんて知りません。私は物を作っただけですから。イヤだったら使わなきゃいいでしょう」と言うのは、どうかと思うのです。就職活動をするにしても、「私、携帯持

っていません」と言ったら、もはや企業に相手にされません。技術は有無を言わず全員を巻き込むようになってしまっています。いったん便利なものをつくり与えてしまったら、たとえ問題な点が少々あったとしても、もう不便には戻れません。選択の余地はないのです。

人間の欲望にはきりがありません。いまの技術は、人間の欲望に火をつけています。功利主義的に言えば、幸せというのは欲望がたくさん満たされることです。いまの状況は、ある意味では幸せだと言えます。しかし、欲望を満たすために環境を破壊している。もはや環境が保たない事態になりつつあります。

そこで先ほどの、「環境は私だ」という発言になるわけです。何とかして環境を守りたい。「環境は私だ」の発想はもともと仏教からもらったものです。仏教では「私って何?」と聞きます。そして、実は私なんてないというところに辿り着きます。議論の進め方としては、まず「私」を、「私とは、私の意のままになるもの」かつ「私とともにずっとあるもの」と定義します。ところが、私自身の心だって意のままになんかならないし、私は死ぬからずっと私とともにはないのだから、結局、「私」なんてものはないということになる。みんな何となく、確固とした「私」があると思っているのですが、「私」はないのだから、そういう思い違いをやめて、「私」というものに捕われることのないようにと、仏教は教えます。

小生はこういう「私」の議論を引っ繰り返して考えたいと思いました。そんなに確固とした「私」ではないのだけれども、それでも「私」はある。普通に考えている「私」のほかに、女房も「私」、子どもも「私」、私の家も「私」の一部、目の前の道路だって、ご近所さんだって、そして自分の周りの環境だって、「私」の一部なのではないか。「私」とは周りを全部含めて「私」なのではないか。

自分のパートナーを失った人の文章に、自分の半身を喪失したように感じたところがありました。それは奥さんもその人の一部だったからでしょう。「私」とは、「狭い意味の私」が関わっている多くのものから成り立っている。また、そのような関係を持つものにより、「狭い意味の私」も変わっていく。確固とした不変の私があるという、物理学的素粒子みたいな「私」観、だけが「私」の見方ではないような気がするのです。もうちょっとゆるゆるに「私」を捉えたほうが、現実にも上手に対処できるような気がしています。

仏教用語に、「依正不似(えしょうふに)」という言葉があります。正法つまり私の身心と、その私の依りどころである依法とは、別物ではないという意味です。依っているものとは、環境と言ってもいいでしょう。つまり、「私」と環境とは別物ではない、環境は「私」だ、ということだと小生は解釈しています。生物学的には、「私」とは、私の周りにあるものを含めた「私」であり、それは、決して欲望のままに環境を搾取するような狭い「私」ではありません。

「私」ばかりの世界を超えて新たな時代の老後を生きる

西洋風に言えば、周りのもののうちで、主体の私が興味を持つものだけが価値のあるものであり、興味がないものには価値がないとなります。しかし、生態系を考えれば、私が意識的に興味を持とうと持つまいと、生態系の中の一員として多くのものが存在しており、そういうものたちがいる(つまり生物多様性がある)からこそ、生態系が保たれています。そう考えれば、それらには、主体である「私」が興味を持とうと持つまいと、価値があるのです。「私」

の好きなものとは付き合う、「私」の嫌いなものとは付き合わないとし、「私」の好きなものだけを集めてきて世界をつくるのが幸せなことだというのが、いまの世の考え方のようです。でも、嫌いなものにも、意味のあることも、結構あると思いますよ。

当世は自分の気に入るように、環境を全部つくり変えてしまう。いつでも活発に活動できるようにと、夜も煌々と光をつける、夏だってクーラーをかけて快適にする。そうしたところが、もう延々とべつなしに働かざるを得なくなりました。昔は、夏は暑いねえ、と言って、のてーっとしていた。冬は冬ごもりで休んでいた。それぐらいの休みをとれるほうが、体のためにはよかったのかもしれませんが。ところが環境を「快適」にしたおかげで、季節を問わず朝から晩まで、いつでも働きっぱなし。これでは、体が持ちません。ネットで繋がっている世界では、夜も海外のマーケットは開いているのですから、おちおち寝てられません。でも、考えてみてください。夜、安眠できない世界なんて地獄以外の何物でもないでしょう。

よりものが豊かなほうがよい、より自由があるほうがよいと、ものと自由とを増やすことを追求してきたのが近代です。働きたいときに昼でも夜でも夏でも冬でも自由に働ける。技術の力により、体や自然の制約を克服するのが進歩でした。しかしそうは言っても、私たちは体を持って生きているのであり、その制約を無制限に取り去ることはできるものでもないでしょう。体の制約を、もう少し大切に作る姿勢が必要なのではないでしょうか。体の制約を守る技術とは、体と相性がよくできている技術と言えるでしょう。制約を越すことを考えるあまり、体と相性の悪い世界を、技術はつくり出しているような気がします。体との相性のよさ、つまりは生物学的視点を技術に導入する必要があると思いますね。

体の制約の克服と言えば、高齢化社会の問題は、まさにこれですね。医療により、どんどん寿命という制約が克服されてきた。これを手放しでよしとできるかが問題です。問題点は二つあります。ひとつは、長生きを実現するのに、ものすごい資源や金がかかっていること。その金は赤字国債でまかなうわけで、つまりは、いまの私が長生きしていい目にあえば、次世代の私がとっても困る。トータルの私で考えたら、長生きはそれほど歓迎すべきことではないのかもしれませんが。

二点目は、折角長生きしても、ありがたみがいまひとつのこと。なにせ体にガタの来た部分が長くなったのですから、その部分を生きるだけでもしんどいのですが、また、その部分をどう生きるかは、きわめて大きな問題です。医者は寿命を延ばしてくれるけれど、それをどう生きたいかは教えてくれません。医者も技術者ですから、「寿命は伸ばしてあげます。それをどう使うかは各人が考えてください」と言うだけ。まさに科学のパターンです。私は、医者にはガタの来た老後という時間を製造した、製造者責任があると思うのですが。

生物にとっては、次世代を残すことに意味があります。老いて次世代をつくれなくなった後まで生きる生物は、ほとんどいません。ところが高齢化とは、子孫をつくれなくなった後の寿命が伸びたわけで、この部分は、生物としては存在する意味を持ちません。もちろん人間はたんなる生物ではないのですから、生物として無意味になったからと言っても問題はないのですが、この部分に、何らかの意味づけをする必要があるでしょう。これに関しては、既存の大宗教も頼りにはなりません。お釈迦様であれ、イエス様であれ、彼らが説教していたときに、それを聞いていた人たちはみんな、三十代、四十代で死んでいたのです。だから老人がどう生きるべきかなんて聖典には書いてないのです。

医療費や介護費として次世代の「私」に多大な負担をかけながら、それを補ってあまりある生き方を見つけなければ、次世代の「私」に申し訳ないでしょう。こんな重い課題が、技術により私たちに突きつけられているのが、いまの時代です。生物学的に考えれば、もうちょっと寿命のむさぼりを、ほどほどにすべきだという気が、私はしています。

本川達雄（もとかわ・たつお）

東京工業大学大学院生命理工学研究科教授。1948年(昭和23)宮城県生まれ。東京大学理学部生物学科卒業。琉球大学助教授などを経て現職。理学博士。専攻は動物生理学。主な著書に、『ゾウの時間 ネズミの時間』『サンゴとサンゴ礁のはなし』（中央公論新社）、『世界平和はナマコとともに』（阪急コミュニケーションズ）、『生物学的文明論』（新潮新書）など多数。また歌う生物学者としても知られており、CD「ゾウの時間ネズミの時間～歌う生物学」（日本コロムビア）も出している。

家裁少年と太公望、16人目のK少年その手記

2004年、当時神戸家庭裁判所調査官辻村徳治氏のすすめで、「補導委託制度」に基づき、家裁管理下に置かれた少年と半年間の生活を共にすることとなった。「些細なことですぐにカッカする気の短いあなたにそんなことできるの」と女房殿に厳しく云われた。釣り好きな私、周りの釣り仲間は皆気短か。短気だからこそいつまでも待てるというこの逆説、気長の人はいい釣り師にはなれないという俗説に心強くした私は石の上にも9年、この10月末に16人目の少年を送り出した。これまでの少年達のおかげで気短な私も少しは気長に待てる太公望になってきた。今回も宿を訪ねて下さった多くの方々の助けをお借りして無事送り出すことができた。少年K君の手記をおとどけします。

あぶらむでの生活を振り返って

少年K

僕はここでの生活で一番考えた事があります。それは、人の気持ちを考えるという事です。つかまる前までは、人の気持ちなんて考える事は出来ませんでした。まず、悪い友達や暴走族と連るんでいる事じたい社会で生活している人達や家族の事なんてまったく考えていない事になります。深夜に暴走行為をやってたり、窃盗をやるのもこれは考えていなさすぎます。ここには沢山のお客さん達が来て自分の頑張りをほめてくれたり、色々話をしますがそんなみんなの為に頑張ってる人がバイクの音でねむれなかったり、自分の大切にしているバイクを盗まれたりと、それを考えるだけで自分は悪魔のような事をしてきて本当に申し訳ないと

思います。もし、それらの事が全て自分にきたら最初は怒れるだけかもしれませんが、積み重なっていくうちに精神的にダメージがきておかしくなります。そういう事を考えれば考えるほど、自分は本当に被害者に対しても家族や僕を支えてくれて来た人達に申し訳ないという気持ちがあります。ここに来たおかげで色々な事を考えさせてもらい、仕事や人との出会いの大切さを教えられました。

まず僕は2月14日に事件を起こし、約一ヵ月後に捕まり鑑別所に入所しました。その時家族の面会や彼女からの手紙を見て本当に更正したいと思うようになりました。でも、あの時も最近までもそうでしたが、不良交友とは縁を切らないつもりでいました。不良交友と遊んでいても非行をしなければ良いではないかと思っていました。そういう考えがあったからこそ、ここに来てからちょっとして夜こっそりと母と彼女とチームの頭に電話をしてしまいました。電話ではもうまじめになるとかそういう話をしていましたが、他の人からしてみれば悪い友達と遊んでいて悪い事をしないなんてまずありえない事だと思ってしまうと思います。今自分でもここで色々な話を聞いてまったくその通りだと思っってます。暴走族仲間と連るんでいと裏にはヤクザが付いているので、いつかヤクザにかんゆうされるかもしれません。よく新聞にはヤクザがさぎをやったとかきょうかつをやったとか色々な事が載っていますが、相手の気持ちを考える事が出来ていれば人からお金をうばう事等出来ません。それにそれはお金をうばうだけではなくその被害者の人生もうばう事になります。それが分かった今、不良交友と付き合っていく事は嫌だと思っました。今まだ悪さをやっている奴は今後ヤクザになってもうどうしようもない所まで落ちた最低な人間になっていくと思っます。そんな人間にはなりたくないです。もう家族を苦しめたくないし、離れるのは嫌です。人を辛い思いにさせたくないです。だから僕は不良交友と縁を切ります。そして、考えた結果これは嫌だったけど彼女とも離れようと思っます。彼女はみんなと地元が違うので僕の知り合いとはあまり関わりはありませんが、彼女の周りも良い人達だけではありません。本当に自分を変えるならば彼女とも離れた方が良く思っました。そして、帰って仕事だけに集中します。話は戻りますが僕はここで二度も電話をしました。一度目の電話は、合計8万ぐらいいはっていました。電話の件は金額が問題ではなく、信用してくれていた人を裏切った事が問題です。ふだん先生は、僕に頑張るとか色々ほめてくれています。かくれてこんな事やった時本当にショックだろうと思っました。2回目もまた裏切ってしまいショックをあたえたと思っます。それでも先生は2回ともボクの裏の顔がある事が分かって良かったと許してくれました。内心すごくショックでたまらなかつたと思っます。それでも許してくれた先生の為に僕はもっとここでの生活を頑張ろうって思っその後ひたすら頑張っていました。8月31日に先生に強く言われて不貞腐れてしまい結果先生を押し倒してしまいました。そして、先生に「お前」と言ったりしてしまいました。僕はその時もうどうにでもなってしまえと思っっていました。なので宿に戻って来てからもここを逃げ出そうと思っただけど、考えているうちに自分はなんて事をしてしまったんだと思っ逃げたら先生はずっと嫌な気持ちのまんまだし、家族はすごく悲しむし色々考えていて、先生に謝らないといけな思っました。そして次の日の夜に先生の部屋をノックしましたが返事がなかつたので部屋に戻りました。そして次の日に食堂まで出ていき先生に謝りました。先生に何を言われるかこわかつたけどまず謝らないといけな思っしたので謝りました。先生は当然許してはくれませんでした。でも、

許してはくれませんでした。調査官が来た日に死にものぐるいで生活するならここにも良いと言ってくれました。それからは、いつもより人の事を考えたりするようになりました。今でもまだ他人に対し「イラッ」とくる事はあるけど、それをなるべく表に出さないようにしています。でも本当に人との出会いがあったからこそ他人の気持ちを考えられるようになりこの人のために頑張りたいと思うようになりました。ここでは僕は色々な人に会いました。大郷先生、おばさん、スタッフのななさん、むとう先生、親子のお客さん、前田さん、シスター、不登校の子供達、ウーファーのボランティア、まだまだ沢山の人がいますが、この人達がいなければきっと自分に変わるチャンスはなかったと思います。僕は今まで皆さんに言われた事をノートの裏とかに書きました。それは、

- ・自分ではなく誰かの為になる生活をする。
- ・自分ではなく他者優先。
- ・信頼されるようになる。
- ・三方良しの精神、自分よし、他人よし、みんなよし。
- ・自分だけではなく世の中沢山辛い思いをしている人達がいる。
- ・誰かを幸せにしろ。
- ・嫌な事から逃げるな。
- ・何事にも基準をしっかりさせる。
- ・正直は一生の宝。
- ・悪い事ではなくまじめにやるのが本当の自由。
- ・やり直すチャンスはいくらでもある。
- ・他人や過去は変えれない。変えられるのは自分と未来だけ。
- ・自分に自信を持つ。
- ・自分の非を素直に認めたり、まぬけさを客観的に笑えたらそれは立派な事。
- ・自分の気持ちに嘘をつかない。
- ・ひのきのようにまっすぐ大きくなれ。
- ・存在の尊さ。
- ・天網恢々、疎にして漏らさず

等々まだまだ沢山ありますが色々教えられました。もし、僕がここではなく、あの時少年院に行っていれば、この言葉は何も知りませんでしたし、多分自分の気持ちに嘘をついて少年院生活をおくり、仮退院後また非行をおかしその繰り返しだったかもしれません。なので色々ここで問題を起こしてしまい迷惑をかけてしまいました。ここにつれて来て下さった家裁の方本当にありがとうございました。僕はここに来たおかげで本当に良い経験が出来たし、自分がここに来た時より変わったと言われるようになりました。ここでの経験を活かし、社会でお母さんの紹介してくれた大工の所で働こうと思っています。まだどうなるかは分かりませんが、僕は地元に戻ったら、非行はしない、不良交友と付き合わないはもちろん、大工の仕事をまじめにやるし、家族が毎日一緒におれる空間を家の中に作りたいと思います。僕の家族はみんな仲が良いですがご飯を食べたりするのは自分の部屋です。それでは、ご飯を食べているのではなくエサを食べているのと同じだと言われました。みんなでご飯を食べるからこそ幸せをかみしめる事が出来ました。なので家に帰ったらお母さんにご飯を作って

もらいたいし、お母さんが忙しければ僕がご飯を作ろうと思います。そのためにこの前チャーハンを5人分作らせて頂きました。なので帰ったらこういう風になってほしいと思っています。この半年間で沢山の人に会い沢山の事を教わり本当に学びのある自分を変えてく半年間になりました。社会に戻ったらここでの人達の教えを忘れず一日一日全力で生活し家族を守って行きたいと思っています。あぶらむの方々本当にありがとうございました。

あぶらむの日々の力、ウーファー

あぶらむの会専従スタッフ 門谷成美

いつも助っ人さんを求めているあぶらむに、今年の冬「WWOOF」(ウーフ)という組織の情報がもたらされました。自然が豊かに残っている場所、または人と人との交流を大切にしているところで環境を大事にしながら生きる人たち(ホスト)と、自然に沿った生き方をしていく知恵を学ぶために、仕事や家事の手伝いをしてみたい人たち(ウーファー)とをつないでくれる世界的組織。お金のやり取りはなく、「知恵」と「力」を交換する仕組みです。

「面白いかもしれないね。」と大郷先生。

ホストとして登録するためには審査があります。有機農場を核としているか、多種多様な人を受け入れる事ができ有機的考えがあるかどうかなどを問うアンケートや様々な書類を提出しました。そして審査の結果、3月1日にめでたくホストとして登録されました。

ウーファー第1号は3月25日から2週間滞在してくれたイギリス人のエド。それから8ヶ月余りの間に、中国1人、オランダ1人、台湾1人、タイ1人、イタリア1人、ギリシャ1家族(5人)、チェコ2人、オーストラリア1人、日本5人(男性1、女性4)と10カ国から14人と1家族があぶらむに来て手伝ってくれました。

ウーファーさんの中には長期休みを利用して来てくれる学生さんもいますが、仕事を辞め、自分の本当の生き方を探し求めて見える人もたくさんいます。皆さん「学びたい」「役に立ちたい」という思いを持っています。今夏はそんな思いを持ったたくさんさんのウーファーさんがあぶらむに集結、物凄いエネルギーであふれていました。常に数十名のお客様がいらっしゃる毎日、そして何とお客様とウーファーさん、ボランティアさんを合わせると70人もの人があぶらむに滞在する！という日が何日かあるではありませんか！「70人、、、無理、、、」さすがにへこたれましたが、やるしかないっ！自然学校やキャンプの子ども達のプログラムのサポートや食事の準備と片付け、部屋の準備と掃除、畑仕事… 仕事は山のようにあり、ウーファーさんに休んでもらえない状態が続きましたが、「私がやりますから休んで下さい。」と逆にスタッフを気遣ってくれます。海外ウーファーさんとのやりとりは、英語が苦手な私にはかなり高い言葉の壁があって、いつもいつも悩みの種。でもこの時ばかりは悩む暇さえありませんでした。必死で単語と身振り手振りで仕事をお願いし続けました。英語

が話せなくても、日本語がわからなくても、こちらの気持ちと状況を判断して頼んだ以上の仕事をしてくれる勘のいいウーファーさんもいました。

「言葉じゃないんだ…」と同じような人が多くて、言葉が通じないからといって、長丁場で疲弊していくスタッフの体を心配してくれる優しい気遣いと、大きな力を「感じる」事ができた夏でした。

ウーファーさんも、あぶらむでたくさんの人と関わりながら自分自身の課題を見つけたり、課題を克服できたときと来た時とは違う輝くような笑顔で帰っていく人もいます。そんな時は本当に嬉しいです。

英会話力はなくても海外ウーファーさんと会話しようとする「度胸」だけはついていく私、町で困っている海外から来た方をみると無謀にも思わず声をかけたりします。そして頼んだ事が伝わっていないとき、自分の責任ととらえ、どうしたら伝える事ができるのかあれこれと努力もします。私個人としても学びはたくさんありました。

先日、3ヶ月手伝ってくれたチェコの2人が帰っていきました。「帰りたくない!」と涙・涙のお別れでした。是非来て下さいとチェコの住所を書いて置いていった2人。「必ず行くよ。」と大郷先生。もうすぐイスラエルのウーファーさんも来てくれる予定です。こうして大郷先生の行きたい場所が世界中にますます増えていきます。

2012年 あぶらむこの一年

- 1月・初日が射すおだやかな年明け。家裁少年のいない家族3人だけの寂しいお正月。
 - ・4日 初仕事としてあぶらむの会一般社団法人の登録手続き（郵送にて）
 - ・5日付けで正式に認可される。
 - ・7日～9日 沖縄からの雪祭り訪問団（10名）寒さきつくなく、それなりの積雪。
- 2月・一般社団法人の認可を受けての記念すべき第1回理事会開催（東京にて）
 - ・長野・富山など近隣県は大雪だったが飛騨地方は例年の1/3ほど。嬉しいやら少々寂しいやら。
- 3月・10日 春を迎えることのできる喜び「春一番の会」昨年は中止でしたが今年は祝いました。
- 4月・第19回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋～金沢250km）を36時間以内で走る国際大会）
 - ・家裁少年（16人目）受入れ
- 5月・田起し（田植準備開始）
 - ・水量調整用の水路完成
 - ・21日 皆既日食、その瞬間鳥のさえずりもやみ静まりかえっていたのが印象的だった。
 - ・26日 田植 翌日富山までの野休みサイクリング
- 6月・2日～8日 福島～宮城～岩手 東北地方震災被災地の旅

- 7月・岐阜生と死の会研修会
 - ・30日～4日 立教小学校あぶらむの里キャンプ
- 8月・3日～5日 名古屋聖マタイ教会キャンプ
 - ・5日～10日 あぶらむ夏期自然学校
 - ・9日～11日 芦屋聖マルコ教会学校キャンプ
 - ・11日～13日 沖縄訪問
 - ・19日～21日 名古屋聖マルコ教会キャンプ
 - ・25日 第5回 桂歌之助落語会
 - ・27日～28日 日本聖公会中部教区聖歌隊合宿
- 9月・12日～17日 第2回野麦峠越えウォーキング&ラン
 - ・22日 稲刈り
 - ・22日 あぶらむ里山生活学校設立に向けてのシンポジウム
- 10月・1日～4日 カトリック教会聖母訪問会院長会議及び研修会
 - ・6日～8日 第5回 WAYNO（アンデスの風コンサート）と野麦峠旧道ハイキング
 - ・12日～15日 沖縄にて講演会、愛楽園訪問
 - ・15日 第2回あぶらむの会理事会（東京にて）
 - ・16日目家裁少年審判（家族の元へ帰る）
 - ・29日～4日 長崎上五島鉄馬の旅
- 11月・10日～11日 社会福祉事業所就労継続支援 A 型事業所齊藤商店ご一行との応援お泊まりピザ・パーティーと豆腐のつくり方教室
 - ・23日～25日 里山生活体験シリーズ落葉はきと焼イモ大会、越冬準備開始
- 12月・あぶらむ通信発行
 - ・あぶらむクリスマス会

2013年 こんなこと（行事予定）

- ・1月12日～14日 あぶらむ雪祭り
- ・2月9日～11日 厳冬期雪祭り
- ・3月25日～4月5日 第13回子供から大人までのネパールの旅
- ・5月25日 田植え&野休みコンサート 津軽三味線二代目 高橋竹山 in あぶらむ
- ・8月5日～10日 あぶらむ夏期自然学校（予定）
- ・8月24日 第6回桂歌之助落語会（特別出演 当り亭宝くじ）
- ・9月11日～16日 第3回野麦峠越えウォーキング&ラン
- ・9月21日 稲刈り
- ・9月22日 持ち寄りコンサート（新企画）
- ・10月12日 WAYNO（アンデスの風コンサート）
- ・10月13日 天生原生林ウォーキング

昔・11月 特別企画 ネパール ヒマラヤ トレッキング 千セリ、田幸共栄、出嵐木、千
富藤三、細野小、川加 (ジヨムソン→ポカラ10泊11日の旅) 一予定、千君、三賀林小、藤出

どうぞよいクリスマスと、そしてよいお年をお迎え下さい。

ⅢⅢⅢ 寄付者一覧 ('11年12月5日～'12年12月13日) 敬称略 ⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢ

江田宜子／河合由美子／八木克道／深田馨子／泊哲次／神原一二美／学校法人 聖ヨセフ学
園岩田幼稚園／塩田純子／坪島行雄／伊藤浩子／静谷英夫／寺田信一／松岡龍哉／市川聖マ
リヤ教会／河野裕道／三沢悠子／楡原富美／岸村信治／財満研三郎・由美子／ジーン・レー
マン／大場弘子／櫻井智則／味岡努・敏江／光安啓明／矢崎ふき子／藤井朋子／古川秀昭・
昭子／俵里英子／佃寿子／田中洋子／吉川恵子／溝際庸介／速水直子／千葉復活教会／江見
淑子／吉羽真治／中村力・英子／中村芳枝／宮田洋子／原川恭一／鶴川久・貴子／片倉小夜
子／岡野峻／矢後和彦・正子／前田康雄・彰子／市川秀一／富田高保／愛知聖ルカ教会／榎
本寛・智景／桃原松五郎／江洲良秀／糸数宝善／又吉亀治／宗像千代子／畑井正春・郁子／
松居勲／新家恵子／大城和子／星野一郎／山下明／長谷川秀司／長谷幸雄／富山聖マリア教
会／池田正毅／加納厚／猪野愈／金城由美子／小島正則／今関公雄／木村秀子／森田トミ／
宮本真紀／二井正秀／(株)アリミノ 田尾兵二／吉越修・みや子／渡辺直明／福岡女学院中学
校・高等学校宗教部／一柳百／工藤真喜子／中部学院大学宗教委員会／太田昌子／高瀬留美
／根本四郎・陽子／雨宮寿子／静岡聖ペテロ教会／石井紫織／新開春樹・桂／横浜聖クリス
トファー教会／新垣タケ子／中島務／遠山章夫・秀子／山田益男／鈴木武次・保子／渡辺洋
一／安藤隆年／鶴川雅行／新倉俊吾・久乃／池崎純一／坂尾新一／長谷川牧子／須間栄津子
／大塚梅子／坂本吉弘／南山大学人間関係学科／島文子／畑野榮一・寿子／名古屋聖マタイ
教会／芦屋聖マルコ教会／岩田牧夫・恵子／日本BSA／豊見城聖マルコ保育園園児と職員
／宮城正男・正子／田口清吾／加藤寛／大郷穰・順子／星野八千代／前田晃伸・容子／鳥袋
洋子／青田浩・高橋竹山／池田秀直／若園紘志／石原つや子／宮城良子／比屋根るり子／谷
孝子／宮脇温子／東京セント・ポール・ライオンズクラブ

ⅢⅢⅢ ガヴィス基金 ('11年12月5日～'11年12月13日) 敬称略 ⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢ

竹村真紀／上田敏明

ⅢⅢⅢ 2012年会費納入者一覧 ('11年12月5日～'12年12月13日) 敬称略 Ⅲ

相澤牧人／朝比奈誼／朝比奈時子／穴井悦子／味岡努・敏子／赤井充也／荒井優仁・彩月／
赤松道子／岩坪哲哉／岩坪瑞枝／一柳百／伊東日出子／伊藤文雄・宜子／岩沢満・喜美／石
崎東人／石崎奈生美／伊藤浩子／伊藤幸史／今関公雄／上村誠／鶴川久・貴子／梅沢雪子／
内田孝／上田敏明／江田宜子／岡野峻／小野裕／大房健樹／大城恵子／大杉匡弘／大槻カズ
子／太田欽也／大橋雅子／大塚梅子／小野田恵子／小川智子／川口弘二・暁子／川上玲子／
片桐多恵子／笠井正志／川満一彦・すわ子／笠原雅子／片岡義博／唐木田麻起子／河合由美

子／木島出／岸井孝司・ミツ子／北昌子／倉辻明男／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／久世治靖／小林賢三・佳子／小池典昭／河野裕道／小池直子／小林信夫・加代／小柳證／三瓶富子／澤野弥生／斎田美代子／佐藤芳子／櫻井智則／斉藤寛明／斉藤美登里／佐藤耕一／佐藤哲典／佐々木国夫・紀久江／笹岡淳也／酒井厚子／志村弘子／渋澤一郎／下田英一・由香／島袋洋子／城下彰／篠宮慶次／島文子／渋谷真理／鈴木孝雄／杉村進／鈴木康邦／鈴木知子／杉本良平・和子／鈴木眞喜子／鈴木康仁／鈴木正士／鈴木裕子／仙敷正俊／染谷孝章／高瀬留美／田中幸治／高橋保／棚橋忍／棚橋美江／田口清吾／竹中浩／竹内元章／俵里英子／丹安紀子／田中孝子／武原正明／高濱友理江／田部博文・あさ子／竹村真紀／田中篤／筑井宏子／佃寿子／寺谷恵美子／富永隆史・敦子／時高照子／外村民彦／直井雅子／中村洋・久美子／中台哲夫・信子／中山美世子／長縄年延／長坂尚／長谷幸雄／西垣正子／西村正和・美帆／西川照子／新倉俊吾・久乃／西口晃／西口喜久枝／西村斐佐代／野田修助・和子／畑野榮一・寿子／長谷川牧子／畑井正春／長谷川秀司／萩谷長生・睦子／土師晴子／畑中幸次郎／福留史郎／平野幸男／比嘉良侑・政子／日野忠市・静子／古市進／福田桂／福田亜矢子／福田一太／深田馨子／藤本雅明／星野一朗／松居勲／前田眞智子／丸山恒／松田捷朗／又吉亀次／前田晃伸／前田容子／丸山千早／前田晃／前田広世／松井尚子／宮田洋子／宮城正男・正子／宮崎秀貴／宮嶋眞／室岡鉄夫・恵／宗像和雄／宗像千代子／武藤六治／森田トミ／百井幸子／山田益男／山内寿美子／藤本隆／八木克道／矢野裕史／山本眞／山崎美貴子／吉植よし子／吉野康／吉野美智子／吉羽真治／渡辺洋一

||||| 新規会員（'11年12月5日～'12年12月13日） 敬称略 |||||||

大木聖／小松純一／篠田泰之／菅原勝美／菅原美穂子／聖母訪問会（法人会員）／根本利子／野崎久子／羽柴加寿代／古澤昭夫・タイ／星野直子／榎本寛・智景／溝際康介／三村英夫／井出米蔵

メールアドレス登録のお願い

あぶらむの近況報告や活動案内等の迅速化が求められています。また、法人化と共に年4回のメールによる通信も発行されています。

あぶらむの会につらなる皆様のメールアドレスをお寄せ下されば嬉しく思います。

登録方法

以下のあぶらむの会メールアドレスへ、お名前と「メールアドレス登録」と題してメールをお寄せ下されば登録完了いたします。どうぞご協力の程よろしくお願い致します。

abram@hidatakayama.ne.jp 「メールアドレス登録」

あぶらむ里山生活学校 大人版

～ 私たちと一緒に田舎生活をしてみませんか ～

将来田舎生活をしてみたい、田舎に居を移すことはできないが関心がある、そんな気持ちのある人、私たちと一緒にここあぶらむの里で田舎生活をしてみませんか。

1986年、40才の時東京を離れ、ここ飛騨の里山で田舎生活を始めた私、全くの素人としての出発でしたから、素人のわからないところがわかると思います。

大工や家具職人等、その道のプロ達との協働やこの25年余で得たいろんな知識や知恵をお伝えします。一緒に私たちと田舎生活をやってみませんか。田舎生活入門希望の方お待ちしております。

季節作業

<1月～3月>

- ・除雪作業、屋根の雪下ろし
- ・雪害による倒木処理
- ・冬材の切り出し
- ・シイタケ、ナメコの植菌作業
- ・家具づくり

<レクリエーション>

- ・雪上ウォーキング
- ・猪臥山(1630m)登山
- ・春一番地(純日本酒)の会
- ・冬は富山湾のにぎり鮎がうまい

<4月～6月>

- ・田植え準備
- ・田植え
- ・畑打ち、種まき
- ・草刈り

<レクリエーション>

- ・山菜採り
- ・溪流釣り
- ・鯉釣り
- ・アウトドアクッキング(石釜ピザ等)

<7月～8月> 休み

〒509-4121 富山県富山市山崎1-2525 TEL 0577-72-4941 FAX 0577-72-4941 E-mail: aburamu@nibatatsyama.net

TEL 0577-72-4941 FAX 0577-72-4941 E-mail: aburamu@nibatatsyama.net

<9月~11月>

大人対学舎山里暮らし

- ・稲刈り、脱穀
- ・秋野菜収穫

・落ち葉集めと堆肥作り
 ・薪作り
 ・越冬準備
 <レクリエーション>
 ・野麦峠、天生原生林ハイキング
 ・食糧調達(富山湾での釣り)

もの作り

- ・丸太で小屋をつくる(チョウハリ=直角の出し方、基礎の作り方等含む)
- ・家具作り
- ・豆腐作り
- ・燻煙品作り
- ・つけもの
- ・味噌作り

道具の使い方

- ・木工電動工具の使い方
- ・チェーンソーの使い方、刃研ぎ
- ・ユンボ、ホイールローダーの使い方
- ・ロープワーク
- ・その他田舎生活に役立つ各種道具

募集内容

- ◎入学随時
- ◎作業及び講座内容は前月及び前々月に案内
- ◎参加の仕方→各自の関心あるものに参加下さい。
- ◎費用
 - ・登録料 10,000円(会員無料)
 - ・後は宿泊費のみ(1泊3食8,500円)
 - 〈のみもの代及びイベント参加費別途〉
- ◎申込み先

一般社団法人あぶらむの会 〒509-4121 高山市国府町字津江 3225-1

TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494

E-mail abram@hidatakayama.ne.jp